



# 福島県におけるツヤハダゴマダラカミキリの発生消長と果樹への加害リスク

福島県農業総合センター 果樹研究所 <sup>たかはし</sup>高橋 <sup>けいだい</sup>佳大・<sup>なかむら</sup>中村 <sup>あつし</sup>淳・<sup>なかむら</sup>中村 <sup>すぐる</sup>傑\*

## はじめに

ツヤハダゴマダラカミキリ *Anoplophora glabripennis* (以下、本種) (図-1) は日本では2002年に神奈川県で初確認され2004年に根絶された(高橋・伊藤, 2005)が、2020年に兵庫県で再度確認(秋田ら, 2021)されて以降、発生地が拡大しつつある。福島県においては、2021年に本種の侵入を確認し(三田村ら, 2022; 佐藤・西浦, 2021)、福島県自然保護課の調査によると県内20市町村(2022年12月26日現在)で確認されている。本種は、在来種のゴマダラカミキリ *Anoplophora malasiaca* に形態が酷似し、多種の樹木を寄主とすることが報告されており(BAKER et al., 2019)、2023年9月1日付けで特定外来生物に指定されている。また、寄主植物としてリンゴ属が記載されており、本県においてリンゴ園の多い場所でも発生が確認されていること(三田村ら, 2022)から本種のリンゴへの加害が懸念されている。そこで、本県における本種の発生消長調査および、リンゴへの寄生リスク調査を行ったので紹介する。なお、本稿の内容は、



図-1 カツラ樹上のツヤハダゴマダラカミキリ雄成虫

Seasonal Occurrence of *Anoplophora glabripennis* in Fukushima Prefecture and Risk of Damage to Fruit Trees. By Keidai TAKAHASHI, Atsushi NAKAMURA and Suguru NAKAMURA

(キーワード: ツヤハダゴマダラカミキリ, 発生消長, リンゴ, 寄生リスク)

\*現所属: 福島県南農林事務所

北日本病害虫研究会報(高橋ら, 2023), 2024年2月の第77回北日本病害虫研究発表会, 同年3月の第68回日本応用動物昆虫学会大会において発表済みである。また、本稿の内容に北日本病害虫研究会報に登載予定の内容を一部含む(中村ら, 2024)。本稿で紹介した研究は、生研支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業(JPJ007097)」(課題名: 相次いで侵入した外来カミキリムシから日本の果樹と樹木を守る総合対策手法の確立)の支援を受けて実施した。

## I 街路樹における発生消長調査

本種の加害が確認されている福島市飯坂町平野の県道5号の街路樹として植栽されている樹高4~8m程度のカツラ、カエデおよびサクラについて、2022年と2023年の6~10月まで約7~10日間隔で、地上部から見える範囲を目視により成虫数および新しい後食痕・産卵痕の有無を調査した。

2022年の結果を図-2, 2023年の結果を図-3に示す。2022年は、カツラにおいて8月2日に2頭, 8月8日に1頭, 8月17日に3頭, 8月24日に4頭, 9月2日に1頭確認された。カエデにおいては、8月2日に3頭確認され、サクラでは調査期間を通して確認されなかった。本種の新しい後食痕・産卵痕は、カツラにおいて8月2日以降確認されたが、カエデおよびサクラにおいては調査期間を通して確認されなかった。

2023年は、カツラにおいて7月11日に3頭, 7月21日に6頭, 7月28日に1頭, 8月7日に4頭, 8月18日に2頭, 8月28日に1頭, 9月25日に1頭確認された。カエデにおいては、7月28日に1頭, 8月18日に2頭, 8月28日に1頭確認され、サクラでは調査期間を通して確認されなかった。本種の産卵痕は、カツラにおいて7月28日以降確認されたが、カエデおよびサクラにおいては調査期間を通して確認されなかった。

2か年の調査結果から本調査地において成虫は、7月から9月ごろまで発生していると考えられる。石郷岡ら(2001)は中国寧夏での本種の発生は脱出開始から短期間で発生ピークになり、その後大きく減少することを指